毎週金曜日
夜七時より
市民館三階

釜ケ崎夜間学校

みんなで つくろう
みんなの 会館

三人よれば 何とかの 知恵

夜間学校ニュース

198[illegible]年 3 月10日

西成区萩之茶屋2-8-9
旅路の里気付
釜ケ崎夜間学校

在日朝鮮人・韓国人・中国人の指紋押なつ拒否断固支持！

定住外国人に市民権を！

釜ケ崎への世間の関心の持ち方と我々の訴えるべきこと

裏面の新聞記事を転載していることについて、色々な声が出ることが予想されるが、あえて掲載した。

それというのも、釜ケ崎に対する注目について、考えてみたいと思ったからだ。

裏面の記事は、読めば判るように、長年炊き出しを続けている稲垣さんが、本を出したということを伝えているものだ。そして、記事の扱いも大きい。

ということは、多くの人に伝えるべき値打ちのあること、あるいは、多くの人が関心をもつであろうと判断された事柄であるということを、あの記事は表わしている。

ここのところ、早朝のセンターで、若い男女をみかけた仲間も多いことと思うが、あの人達は、釜ケ崎でのキリスト教関係の施設での活動の手伝いなどをするためにきた人たちだ。

また、越冬期間中には百人をこえる人達が連日、釜ケ崎の越冬闘争を共にするために来ていることも、みんなよく知っていることだと思う。

釜ケ崎は、日本国中の関心事、とまではいえないが、まったく無視された存在でもないということだろうと思う。

では、なにが人々の関心

仲間の死

本籍・住所（通称）北海道、氏名サカモトケンタロウ、年齢57歳の男性、左上腕部"クモとクモの巣"、天下泰平・流れ星"左大腿部"もみじ・とっくり盃"の入れ墨、着衣青色線入れ、国防色の作業服、ベージュのチョッキ、ネズミ色のチョッキ、ラクダ色のパッチ、軍足、長靴・遺留金品なし

右の者は昭和6[illegible]年3月[illegible]3日午前6時[illegible]5分新今宮駅ガード下において発見されたもので、同日午前0時（推定）同所において死亡（死因不詳解剖中）したものと思われる。

1989年3月10日(金)

をよぶのだろうか。
新聞記事では「炊き出し」のことが主にとりあげられている。
釜ヶ崎には、よく海外からもたずねてくるが、それらの人がもっとも驚くことが、「繁栄する経済大国」である日本の中で、青カンを余儀なくされる者がいることである。
屋外で眠る者がいることの驚き、食にことかく人々がいることへの驚きは、海外から来た人々のみならず、日本国内から来た人々も同様に感じるようである。
だから、新聞のあつかいも大きい！
そして、また、人々の釜ヶ崎への関心も大きくなる。
このことは、青カンを余儀なくされる仲間にとっては、完全とはいえないまでも、いくらかは助けになるだろう。もっともっと関心をもつ人々が増えれば、更によい状況になることはまちがいない。
だが、釜の元気な仲間の中には、そういうことで釜ヶ崎に対する関心が高まることを喜ばない人もいる。
青カンをする人間は、釜のごく一部のもので、釜の労働者のほとんどは、働いて稼ぎ生活をしている。その働き人としての誇りを傷つけるものだというわけだ。
働き人としての釜ヶ崎労働者に対する注目も、仕事の多い現在、少しは高まっているようだ。大阪府労働部が、センターでアンケートを集めたということも、その一つのあらわれだろうと思う。
ただ、この傾向の注目の仕方は、利用主義的なものだ。労働力として必要な状況があり、良く働く、安い人材を確保するにはどうすべきかが関心のまととなっている。別に釜の労働者の社会的役割分担が認識しなおされているというわけではない。だから、仕事が少なくなり、アブレ地獄となれば関心は急激にうすれる。

我々は、何を訴えるべきか❓

◀一九八九年三月十日 朝日新聞・朝刊

ひと

大阪・釜ケ崎で炊き出し 14年目

稲垣（いながき） 浩（ひろし）さん

大阪市生まれ。兵庫栄養専門学校で栄養士の資格を得る。給食会社勤務を経て一九七二年、暴力手配師追放釜ケ崎共闘会議結成に参加。釜ケ崎炊き出しの会代表。44歳。

関西新空港など建設好況で二万五千人と膨らむ日雇い労働者の街、大阪・あいりん地区（釜ケ崎一帯）。その一方で、ここの海道公園には毎日、朝十一時と夕方五時の二回、百人前後の労働者の列ができる。仕事にありつけない労働者に、砕米を炊いた雑炊を配る。年配者が目立ち、身のこなしは重たげだ。

専門学校生のとき、労働者の栄養状態を住み込んで調べたのが、釜ケ崎とのつきあいの始まり。第一次石油ショックの不況下で、路上で生活する労働者が増えた。「理由はいろいろだろうけど食いもんに困る人がいるんやね。食えない人には、まず飯や。わしらでできることをしよ、と出発しましてん」

はじめは近くの市場で残った菜っ葉や魚を探していた。いまは十人の専従者で作る。費用は、朝日新聞「声」欄の投書でできた全国の支援グループ千三百人や地元労働者のカンパ年間五、六百万円でまかなう。

「よく続くな」という声の半面、「炊き出しで釜ケ崎の労働環境がよくなるわけでもないのに」との見方もある。かつての釜ケ崎日雇労組から分かれ、新しく釜ケ崎地域合同労組をつくった背景にも、この〝見解の差〟がある。

「ただメシ食わす、と批判するのは、みんな元気な人やし、行政は窓口だけ。働けない野宿者かて人間や」

手配師追放を掲げて活動していたところ、公務執行妨害などで逮捕歴十数回。釜ケ崎をよく知る牧師は「彼が体を張って活動してきた証明です」とも。「釜の労働者の権利確立を」と大阪市議選に四回立候補、落選。こんな「労働者の町」の実情と自分の胸の内をつづった『釜ケ崎炊き出しのうた』（大阪・海風社刊）をこのほど世に問うた。

（荒谷 一成記者）